『地域総キャンパス』で学生を育成

西南女学院大学の地域連携教育　新カリのメインテーマに

北九州市に立地する西南女学院大学（浅野嘉延学長、保健福祉学部、人文学部、助産別科）は、2024年に教育改革を打ち出し、その戦略に「地域総キャンパス」を掲げた。とはいえ、これは新しい教育制度を構築するのではなく、これまでの地域連携教育をしっかりと力リキュラムに組み込んでいくことである。このたびの教育改革について、伊藤直子副学長・保健福祉学部長、小川尚事務部長、中島徹事務局次長、隅田直孝教務課長に聞いた。

伊藤副学長等に聞く

○これまでの学びを総括

2024年、西南女学院大学は、北九州すべてをキャンパスに見立て、この地域で育てる教育を『地域総キャンパス』というキーワードで表した。

「本学の学生は、これまでも地域での取り組みなどを通じて大きく成長していました。しかし、正課外のボランティアだったり、ゼミ単位だったりと、組織的な取り組みになっておらず、また、事務局も学内全ての取り組みを把握しているわけではありませんでした。そこで、2016年度に地域連携室を設置し、同室と学生課が情報収集したり、地域連携において外部との窓口としました」と取材冒頭に同席した浅野学長は切り出す。

「その後、学長直轄の「将来計画検討プロジェクト」で大学の魅力をどのように打ち出すか議論していた際、大学と地域は学びにおいて地続きで地域全体がキャンパスであり、これを本学の教育力としてしっかりと打ち出していこうと。この方針が大学評議会でも承認され、本学の教育方針となりました」。

建学の精神は「感恩奉仕」。親や友人、教職員、地域の人々などすべてに感謝する心を持ちながら他者に奉仕し、社会貢献することである。

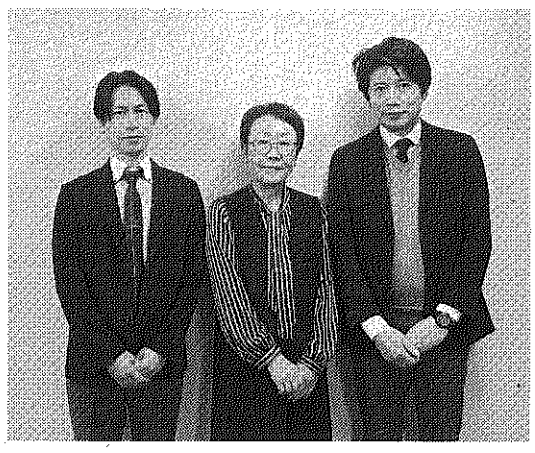
「地域はそこで働く様々な人によって支えられています。本学学生が志す、看護、福祉、栄養や助産の専門職もその1つ。地域に出て地域の方々と過ごし課題を共有することで、それを実感してほしい。卒業後は専門職として感謝をもって地域に還元していく。この学びを2025年度からの新カリキュラムに組み込み、本学の教育に位置付けていきます」。

新カリキュラムで展開するのは、全学共通の教養教育である『総合人間科学』に新設した2つの科目「地域活動の基礎」と「地域と大学」。すべての学生が入学直後に、地域で学ぶ姿勢や、様々な分野の専門家から社会の成り立ちについて学ぶ機会を持つ。

地域のボランティア活動には1年次から参加でき、活動時間と課題の提出によって単位が認定される。また、専門教育科目においても、学生の学外活動をいかに取り入れていくか日々検討をしている。

「コロナ禍を経験したことで、大学として柔軟な授業実施に対応する力がついたので、学外での学びを積極的に取り入れていこうと。そこで、地域での活動をしっかりと認めていくこととしました」と伊藤副学長は説明する。

各学科の専門科目も見直し、地域活動や実践による学びとリンクさせる。特に英語学科では、日本航空から現役キャビンアテンダントが教員として赴任し、エアラインの実践コースを担当する。



左から隅田課長、伊藤副学長、中島事務局次長

○相手の課題を自分事化していく

これまで行っている地域での代表的な取り組みを紹介しよう。

まず、「つなぐヒカリプロジェクト」である。これは観光文化学科によるもので、北九州市小倉北区、福岡県立小倉商業高等学校、北九州高速鉄道株式会社との協働で、高校生と大学生が北九州モノレールの特別装飾列車のプロデュースを行う。それぞれが2車両ずつコンセプトを定め、一夜限りの特別列車を運行させている。

2つ目が、商船三井テクノトレード株式会社の日本発の水素・バイオ燃料のハイブリッド型観光船活用企画の一環として、学生は、フィールドワークや市場調査を実施し商用コンテンツの企画立案や「親子ふれあい企画」を実施している。

そしてこのたび、看護学科の実習先である小倉記念病院と連携協定を締結した。

「例えば、外国人の患者さんに対応するため、英語学科の教員・学生が通訳するなど、本学の様々なリソースを病院でも活用していただければ。また、地域イベントでは、インバウンド観光客相手に英語学科の学生が通訳したり、茶道部がお茶を点てて、それをまた通訳したりと、本学の各学科学生が協力し合いながら活動をしています」と小川事務部長は述べる。

学校法人西南女学院は開学100年の歴史を持ち、地域では「西女の学生さん」として知られる。約3割の学生が地元に就職するため、地域には卒業生も多い。こうした取り組みの結果、市からは「第1回北九州市小倉北区・地域貢献大賞」が贈られた。地域の人たちは学生の地域活動を暖かい目で見守ってくれている。

○学生の成長

地域での学びを通して、学生は具体的にどのように成長しているのだろうか。

「社会の側が何を求めているのか、そのニーズが考えられるようになります。そして、そのニーズは、学生時点での知識・技術では解決できないことの方が多いのです。一方、学生は地域で感謝され、必要とされもします。その中で相手の抱える課題が自分事化して、それを解決することでもっと喜んでほしいと感じる。こうした体験は学内では得られません。将来の見通しや学びへの動機付けは早ければ早い方が良い。複雑で多様な社会を実感し、そこを見据えて確実に応対していく力が身についているように思います」と伊藤副学長は力を込める。

看護学実習では、人が亡くなることも体験する。子ども食堂では「ご飯が食べられない」子どもいることを知る。それはどれも学生たちにとって人生最大級の衝撃であるとともに、学習の強い動機になりうるのだ。

○教職員も地域へ

地域からは「真面目」「しっかりとしている」「気が利く」といった評価を受けるという。「教育の成果をきちんと見てもらえているようです」。

一方、学生自身には、活動での成長の指針として、ディプロマ・ポリシーを常に意識してもらう必要があったため、全学のこの教育体制を簡潔な言葉で示す必要があった。

『地域総キャンパス』というキーワードは、あらゆる関係者に本学の教育を伝えるものです。いくら高尚で素晴らしいコンセプトを掲げても、まずは学生に分かりやすく伝わるよう表現や見せ方を工夫しないと意味がありません」と隅田課長は指摘する。

規模の小さい大学として、学生・教職員が皆で知恵を出し合って新しい価値を創出していく。

『地域総キャンパス』は教職員に向けた言葉でもあり、私たちも地域に出て一緒に汗を流さなければなりません。それもまた、大学を開放し、魅力に繋がることだと感じます」と中島次長は述べる。

西南女学院大学は、主に北九州に貢献する人材を、地域の人たちに育ててもらっている。それを大学のカリキュラムにうまく埋め込みつつ、それを特色にしているのである。

高校進路指導室の扉

―新しい高大連携・接続に向けて―

本校における大学との連携活動は、常に「探究的な学び」および「進路指導」との連携を考えて取り組んでいる。大学との連携によって、取り組む内容の質を向上させ「探究的な学び」へ還元されるように、同時に大学の出張（中学校・高等学校、2023・2024年）、東邦大学からの出張講座「地球科学教室」（高校2年生、2022年）、千葉工業大学からの出張講座「情報・宇宙・半導体」（高等学校、2023・2024年）、東京科学大から名誉教授を招いての国際理解講演会（高校生、2023年）等を実施している。

進路指導

進路指導においては、学校の柱と位置付ける放課後に開設する自習室（学生チューターによる学習・進路指導サポートを主とする学びのシステム）と教員が実施する補講・補習、個別学習アプリおよび校内で実施する模試の連動性を強化育プログラム等を開催している。

おわりに

本校では、「探究的な学び」、「大学との連携活動」、「進路指導」の3つを連携させることで、学力の3要素をバランスよく向上させ、学びの柱にし、『答えを求める学びから問いを持つ学びへの変革』をテーマに学びの質を転換し、VUCAの時代を生き抜きAIを使いこなす、持続可能な社会の創り手の育成に取り組んでいる。

「探究的な学び」を柱とする。

一方の「探究型授業」であるが、学習単元あるいは学習のまとまりの中で課題解決と課題発見を繰り返すことで深まりを増す学びを実践している。授業の中では課題設定を明確にし「ふりかえる。

「探究科」は毎週水曜日の午後に全校で取り組む授業であり、教育課程上の単位数は1であるが特別活動（学級活動）の1単位と合わせて1年間

な学び」とは「探究科」と「探究型授業」の2つの学びを指す。

2020～2024年）、東京科学大から名誉教授を招いての国際理解講演会（高校生、2023年）等を実施している。

進路指導

進路指導においては、学校の柱と位置付ける放課後に開設する自習室（学生チューターによる学習・進路指導サポートを主とする学びのシステム）と教員が実施する補講・補習、個別学習アプリおよび校内で実施する模試の連動性を強化